

日本人とパール、そしてダイヤモンドの歴史

原初、白い光が射したとき

ある人間科学・文化心理学者の研究によると、「白」は4分の1以上の日本人が嗜好色のトップにあがる、特別な色。他国では類を見ない現象といえます。

ここでは、白く、清らかな輝きで日本人に愛され続けている二大宝石、パールとダイヤモンドを題材に、その根源に迫ります。

文＝露木 宏（日本宝飾クラフト学院理事長・宝飾史研究家）

I. パールとの出会いは縄文時代だった

パールもダイヤモンドもその放つ光は、私たち日本人にとっては特別な輝きだった。神秘的な美しさはもちろん、私たちがその光に見出した意味と価値を、パールは古代から、ダイヤモンドについては近世から近代の歴史の中に探ってみよう。

日本人とパールのかかわりは縄文時代までさかのぼる。福井県の鳥浜貝塚から約5500年前の縄文真珠が発見された。弥生後期から古墳時代には、日本は真珠の産地として大陸で知られるようになっていた。そのことは、『魏志倭人伝』に卑弥呼の後継者の壹与が白珠（真珠）5千個を中国に献上したと記されていることからわかる。奈良時代にもパールは発見されている。『古事記』の撰者である大安萬侶の墳墓から4個のパールが出土し話題になった。

当時パールは、こうした来世の心の安らぎを祈念するために用いられた他、装身具に使われていたようだ。正倉院にも多数の小粒パールが伝わり、これらは礼冠（らいかん）・冕冠（べんかん）と呼ばれる唐風（中国風）の王冠を飾った。その数は3800個にもおよぶ。

そして、万葉集には「装身」に関連する歌が747首あり、そのうち玉に関する歌は6割近い。中でも白玉の歌が最も珍貴なものとして数多く詠まれている（小川安郎『万葉集の服飾文化』）。当時、パールは「白玉（しらたま）」または「鮑玉（あわびだま）」と呼ばれ、思う人への贈り物、愛情の表現として用いられることが多かったと思われる。また、装身具として使われることもあり、纏（かづら）と呼ばれた髪飾りの一部にパールを使った歌もある。

では、生活のさまざまな場面でパールを用いた奈良時代の人々は、その価値をどこに見出していたのか。その答えが隠されているのが、東大寺の不空羂索（ふくうけんさく）観音菩薩像である。眉間（みけん）の白毫（びやくごう）には直径8ミリ強のパールが埋め込まれている。白毫とは光明（こうみょう）を放つという白い毛のこと。つまり、パールの安らかで静かな輝きに光明、すなわち暗闇を照らす明るい光（寂光（じゃっこう））や希望を見出したのではないかと推察される。

II. 日本人に芽生えたのは仏教的なダイヤモンド観

一方、ダイヤモンドと日本人の最初の出会いは江戸時代前期の1666年、出島にオランダ船によりダイヤモンドの指輪が1個持ち込まれたことに始まる。だがこの時は時期尚早のため、商談自体は成立しなかった。1700年代後半になるとダイヤモンドは徐々に日本に入ってきたようで、1762年に平賀源内が湯島で開いた物産会にはダイヤモンドの指輪が出品された。その時の出品記録『物類品騭（ぶつるいひんしつ）』ではダイヤモンドは「金剛石（こんごうせき）」と呼ばれ、源内は「紅毛人持来る所のデヤマン（ダイヤモンド）なり」と解説している。その当時、ダイヤモンドは日本人の認識では、高価な西洋の宝石というだけではなく、仏典の金剛（最も硬いという意味、転じて仏の智慧）に由来する、有難い宝石として珍重していたようだ。

こうした西洋とは異なる仏教的ダイヤモンド観は、近代明治まで続いた。当時の文豪たちは、書簡や話題になった小説などの中で「金剛石」という言葉を用いていた。また、日本人のダイヤモンド観を如実に示す一例に、明治20年に昭憲皇太后が女子学習院へ下賜された「金剛石」の御歌がある。

「金剛石もみがかずば 珠のひかりはそわざらん 人もまなびてのちにこそ まことの徳はあらわるれ」。この歌でダイヤモンドの輝きは徳にたとえられ、皇太后の、精神性の高いダイヤモンド観が端的に表現されている。

III. パールには「光」を、ダイヤモンドには「徳」を見出して

日本の女性が、あこがれのパールとダイヤモンドを身に着けられるようになるのは日露戦争前後のことである。そのころになるとダイヤモンドの指輪を売る宝石店が都内や大阪などに現れ、その後、御木本幸吉の養殖真珠の店も銀座に開店している。さらに、ダイヤモンドは『金色夜叉』などの小説や女性像を描いた絵画にも取り上げられ、幸せと富の象徴として一気に民衆の支持を得た。パールはダイヤモンドの強い輝きに及ばないものの、その絹のような優しい光沢は女性を魅了し、「宝石の女王」としてダイヤモンドと人気を二分した。

と同時に、かつての日本人はパールに「光明」を、ダイヤモンドに「徳」という特別な精神的価値を見出してきたのではないだろうか。なぜなら、日本人にとって、装身具は「身」を装うだけでなく、「心」をも装うアクセサリである、というのが共通の概念と、思うからである。明治以降、時代は変わっても、元来、装身具に心の価値を求める日本文化の伝統は連綿と受け継がれてきた。そして、これからも私たちはパールとダイヤモンドに特別な思いを抱き、こよなく愛し続けていくのであろう。